

住宅の類型的分析についての研究

青柳 正規
大坂 彰

—ローマのスキエラ型、リネア型住宅の発展過程—

目 次

序 研究の目的

1. 類型的分析の視点
2. ローマのスキエラ型住宅
3. 2 チェルラのスキエラ型住宅
4. スキエラ型住宅の分類
5. スキエラ型住宅の形成過程
6. 変化の過程, リネア型住宅の成立
7. 住宅類型と現実の住宅

序 研究の目的

この研究の目的は、都市ローマの歴史的な資料を素材にして、現実の住宅がどのような発展の過程を経てきたかを、都市との関係を見失わずに、捉えることである。そのためには、単に歴史的資料の解釈という方法によってなしえなかったダイナミックな視点を必要とする。ここで、1960年代、ムラトーリ(Saverio Muratori)によってはじめられ、現代イタリアのムラトーリ学派と呼ばれる人々によって確立しつつある類型的方法は、住宅、都市の組織、構造を、時間、空間のなかで有機的に捉えるのに非常な力を発揮することができる。われわれは、住宅、都市がどのように成立し、どのような過程で形成、変化して現代にまで受け継がれてきたかを方法の確立とあわせて、研究の目的とした。

1. 類型的分析の視点

イタリアの農村住宅について、類型学的な考え方に基づく研究は、ムラトーリより以前に地理学の分野で、レナート・ピアスッティ(R. Biasutti, 1875-1965)によって方法の確立が試みられている。

1926年「イタリアの農村住宅研究のために」と題する論文に、「(農村住宅の)機能的特徴の重要性を否定することはできない。すなわち、住宅の形態的構造と機能は人間の手によってつくられた他のものと同様に、相互依存的な密接な関係によってひとつのものに統合されている。しかし、これらの関係は場所、時間によって変化するのである。たとえば、ひとつの確定的な構造は異なる

形として現われたり、農業の限定された機能や物理的、外的環境は直接的な必要性から、異なった構造をもつタイプの住宅をつくりだす。」

ピアスッティによって提起された重要な概念は、住宅の機能と形態およびその類型についてである。

そこには、住宅の構成を考えるうえで、基本的な見方が示されている。住宅は機能と形態が統一された二重物として捉えられ、現実の住宅は相互依存的な関係によって統合された全体を構成している。この考え方から、二つの観点をひきだすことができる。つまり、形態的な方向からは、住宅の空間構成を問題にし、空間単位の結合関係、組織体としての住宅を物理的な側面から観察することである。

機能的な方向からは、住宅が人間の活動とどのようなかわりをもっているか、すなわち、住宅を内側から意味をもった全体として把握することである。住宅の用途機能からはじまり、都市ともつながりをもつ、家族の形態、産業の機能、社会、経済の形態など、住宅を成立させているあらゆるものが関係する。

類型の概念は明確にうちだされていないが、抽象的な住宅の構造と現実の住宅とは区別されている。彼の指摘は、構造によって成立している住宅が、現実の物理的、社会的環境の要因によって、形態的ヴァリエーションを生み、しかも時間的経過のなかで変化すると述べている。ピアスッティのいう住宅の構造を類型と読みかえると、のちにムラトーリ学派の人々によって確立される考え方が先き取りされたことになる。

さらに、この視点を発展させることができる。たとえば、あるひとつの類型(住宅構造)によって成立している住宅群を地理的分布として捉えてみると、地域の文化的影響関係、地域の形成過程を問題にすることができる。また、類型は歴史的發展をする。類型は時代の要求を反映し、新しい時代の現実が生まれると、それに対応して新しい類型が生みだされる。そして、新しい類型とは対立した関係によって、断絶するのではない。新しい類型は、それ以前の類型を引き継ぎ、歴史的連続性と現実との対応関係を保ちながら、発展の過程をたどるのである。

以上、ピアスッティの農村住宅についての考察から得た手がかりをまとめる。

- A. 住宅は形態と機能の観点から分析できる。
- B. 類型と現実の住宅は区別され、相互に対応関係をもつ。
- C. 類型は地理的分布をかたちづくる。
- D. 類型は歴史的発展過程をたどる。

これらの分析の視点を基礎にして、農村住宅とは異なった状況にある都市の住宅を読みとるための手がかりを得てみよう。

都市の住宅を読みとるには、手順として、Aの機能的関係を拾いあげることからはじめなければならない。大まかに住宅本来の機能と都市状況からくる機能的関係を区別してみると、

1. 「住む」ための基本的用途機能。
2. 単一家族専用の住宅と多家族共同の住宅。
3. 商業、生産活動が付属する住宅。

1の住宅に「住む」ことの意味は、生活基本的要件をいい、食事をするのと寝ることが考えられる。この二つの用途を欠いた住宅は、特殊な場合を除いて、存在しそうもない。たとえば、住宅の発展段階において、この基本的用途は、1室だけのプリミティブな住宅から2室の住宅への段階的に移るとき、厨房と寝室に分化する場合が多い。第2節で説明するスキエラ型住宅においても、同様の分化の過程を示している。

2で、原始社会においては社会構成のタイプに従い、家族単位と住宅との対応関係は複雑なものとなるが、われわれの都市社会では、社会的グループとしての家族がひとつの住宅を所有するというのが原則である。したがって、建築形態的に家族単位の集合は二つに区別できる。単一の家族が1軒の住宅を専用する場合と、複数の家族が共同住宅として集合する場合である。前者は組織がひとつだけの単位。後者の共同住宅は、単一家族に対応する組織が集合して、より大きな組織を形成し、しかも組織相互を結ぶ共同の空間が生れる。このように、1家族と多家族との住宅では大きな違いをみせる。都市の住宅にとって単一家族から多家族の住宅に変化する過程は都市化の進行と一致し、住宅の多家族化は住宅の都市化とも呼べる現象である。

3の「住む」こと以外の機能が住宅と付属する場合、都市住宅では商店、仕事場など都市の経済活動と関連する用途を含むことが多い。歴史的に、産業革命以前の都市では、小規模な商業、生産活動が家族を中心として発達し、当然、初期の段階では住宅にそれらの機能が付属することになる。この段階では、住宅部分と商店、仕事場などは建築空間的、用途機能的にも明確に分離されず融合あるいは複合した状態である。それが、経済的發展に伴い、経済活動が大規模になるにつれて、住宅部分とは区切られ、最終的には独立した商店、仕事場などが成立する。この過程を住宅の特殊化と呼び、特に商店が主

体となる場合、商店化（あるいはタベルナ化）と呼ぶ。

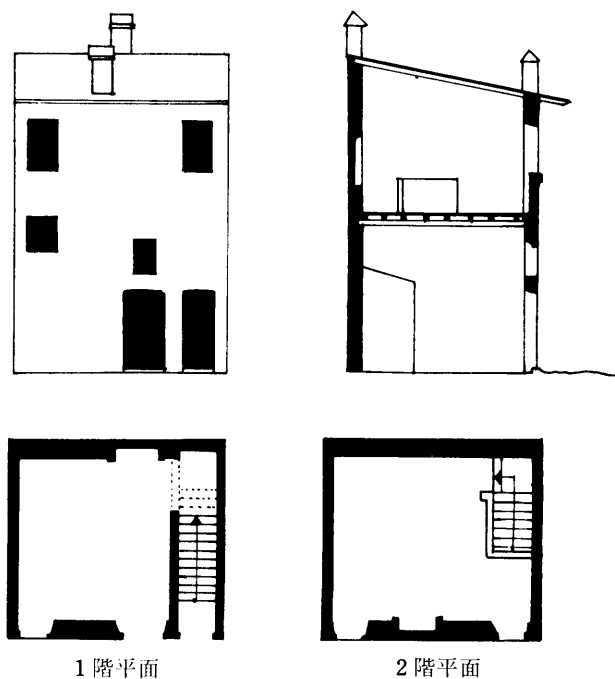
これら都市の住宅に関連する機能は、建築形態と繋がりをもたせて総合的にとらえることによって分析の手がかりを得ることができる。たとえば、1は住宅組織の構成単位、単位の結合システムなど、2はスキエラ型住宅から多家族化したリネア型住宅の形成過程、3では住宅の特殊化、商店化など、ピアスッティの農村住宅から得た類型の基本的な考え方に加え、都市の住宅を読みとる視点となるのである。

2. ローマのスキエラ型住宅

都市ローマの歴史的発展のプロセスを古代ローマ共和政時代、帝政時代、中世、近世の4段階にわけるとすれば、共和制時代は都市の揺籃期、帝政時代は膨張期、中世は収束期、近世は回復期といえるであろう。したがって、ローマは生長の波を二度繰り返したのである。

これから分析の対象とする住宅は、中世から近世にかけて都市発展とともに形成されてきた都市の住宅で、現代の側から、一括して前工業化時代の住宅と、呼ぶこともでき、現存するイタリアの歴史的中心街区を占める住宅群である。

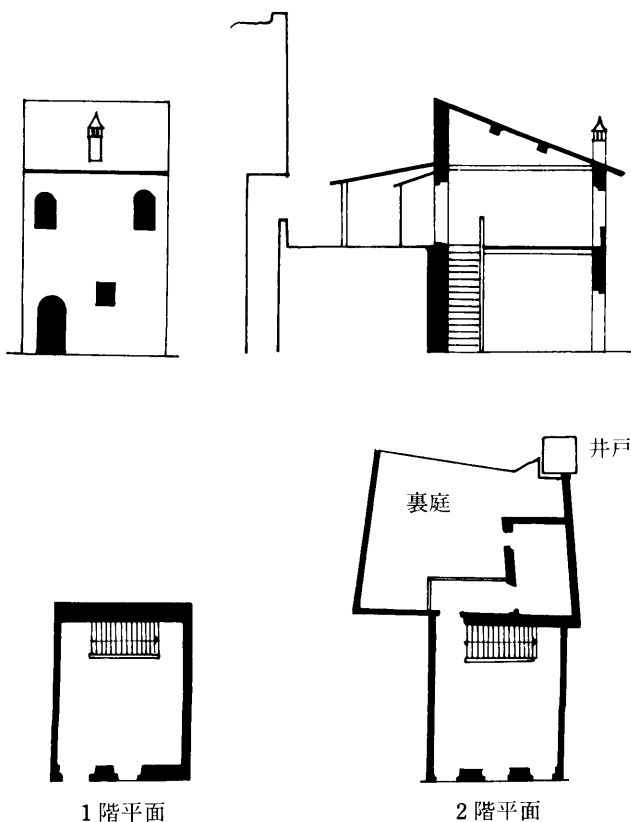
具体的、歴史的な資料として小住宅の様子を知るのに重要なサントスピリト修道院の17世紀の記録をもとに観察を進めよう。この記録は、当時の教会、修道院がローマ市内に多くの不動産を所有し、その財産目録として図面、記述を含み、一種の地積図として保存されてきた。



図(1), A 1 チェルラのスキエラ型住宅

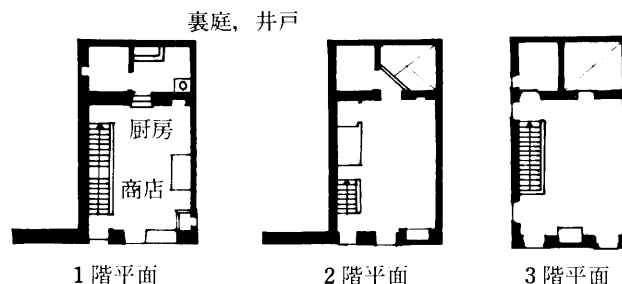
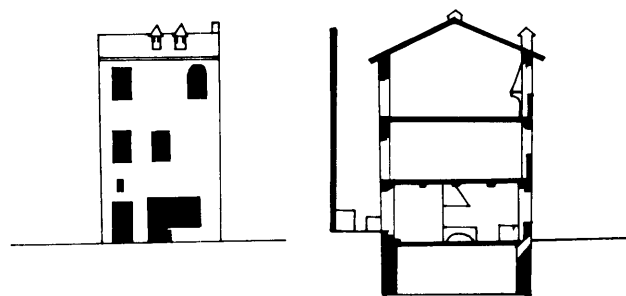
図(1), Aの住宅は2階建てで、三方閉じた壁体によって隣地に接し、道路側にだけ正面をもっている。立面に注目すると、1階には2つの入口をもち、1階と2階にそれぞれ1家族ずつの2家族用住宅である。1階の住宅へは道路から直接アプローチし、2階へは内階段をもつ。それぞれは1室だけで構成され、2家族共同のスペースは無く、完全に分離している。アプローチの方法も、道路にそれぞれが入口をもち、ほぼ対等な関係を保っている。

図(2), Bの住宅は傾斜地に建ち、2階に裏庭をもつ。1階、道路側には入口が1ヶ所で、奥に取りついた階段によって2階にアプローチする。これは1家族専用住宅で、構成は2室である。裏庭には隣家と共同の井戸がある関係から2階が厨房となり、裏庭側の付属屋は断面からも後の増築と考えられる。



図(2), B 1 チェルラのスキエラ型住宅

図(3), CはBと同じく1家族用住宅であるが、立面1階の開口には、住宅用入口と商品を陣列するためのバンコと呼ばれる台が付属する入口がある。したがって、1階は商店、2,3階は1家族用の住宅となる。しかし、1階平面から、商店と住宅へのアプローチは、外部からは別々の入口をもつのに内部では連絡されている。この理由は、生活に必要な水は裏庭にあり、上階の住宅の厨房は必然的に1階に置かれ、住宅と商店は分離していないことがわかる。



図(3), C 1 チェルラのスキエラ型住宅(商店付)

A. B. Cの住宅の特徴を比較しながら、その内部構成を考えてみよう。

住宅A. 2家族, 1室

住宅B. 1家族, 2室(裏庭)

住宅C. 1家族, 2室+商店(裏庭)

このうち、Aに対してB, Cは室数によって対比することができる。2室構成の住宅の場合、相互の室はアプローチの動線によって特徴づけられる。2つの室は直行型階段によって連結され、一方の室は動線が通過し、他方は行き止まりとなる。この動線が通過するか、しないかの相違は室の用途機能に対応し、通過する室は厨房、居間として、行き止まりの室は寝室となる。ただ、Bの例では裏庭の関係から2階が厨房兼寝室となり、1階は作業場、倉庫、エントランスとして用いられ、実質的には1室住宅となっている。2室住宅のそれぞれの室は完全に独立せず相互に依存し、発展過程の段階からも1室住宅から2室構成へ移行したばかりの状況を読みとることができる。つまり、住宅が社会的な発展に伴い、1階建から2階建へ量的に空間が2倍に増えることによって、機能の分離が可能となる。しかし、その分離の状態は、近代住宅のように個室(個室空間)と廊下(分配空間)というかたちで空間が分化するのではなく、アプローチの動線が個室を通過する未分化のままである。

住宅の構成と都市的コンテクストに関して注目すべきことはB, Cにみられる裏庭の問題である。これらの住宅は道路側に窓を所有し、採光のため裏庭が必要であったというわけではなく、井戸を所有することが第一の目的であった。また、住宅Aが裏庭、井戸を所有していないのは、当時の記録から推定すると、道路側に共同の井戸があるか、あるいは水を売り歩く商売が成立していた

からで、裏庭をもつ住宅が構成する道路とは異なった都市空間を形成していたに違いない。住宅の内部構成と都市的コンテクストは相互に密接な関係を保ち、全体として組織体を形成する。

これまで論じてきた住宅はスキエラ型住宅と呼ばれ、四方壁体で囲まれ、一方だけが道路に面し、都市の内部の道路に並列した配置をとる都市住宅である。都市発展とともに新しい構成の住宅が生まれ出されていく過程として、スキエラ型住宅の形成と変化、それに、共同住宅であるリネア型の成立をたどってみよう。

3. 2 チェルラのスキエラ型住宅

前章で説明した住宅A, B, Cは共通した形態的特徴を認めることができる。それはほぼ一定の間口と奥行をもち、四面壁体にとり囲まれた立方体を形成していて、まさに空間単位であり、ラテン語の部屋 cella に由来するチェルラと呼ぼう。そうすると、これらの住宅はチェルラが上下に重なったものといえる。

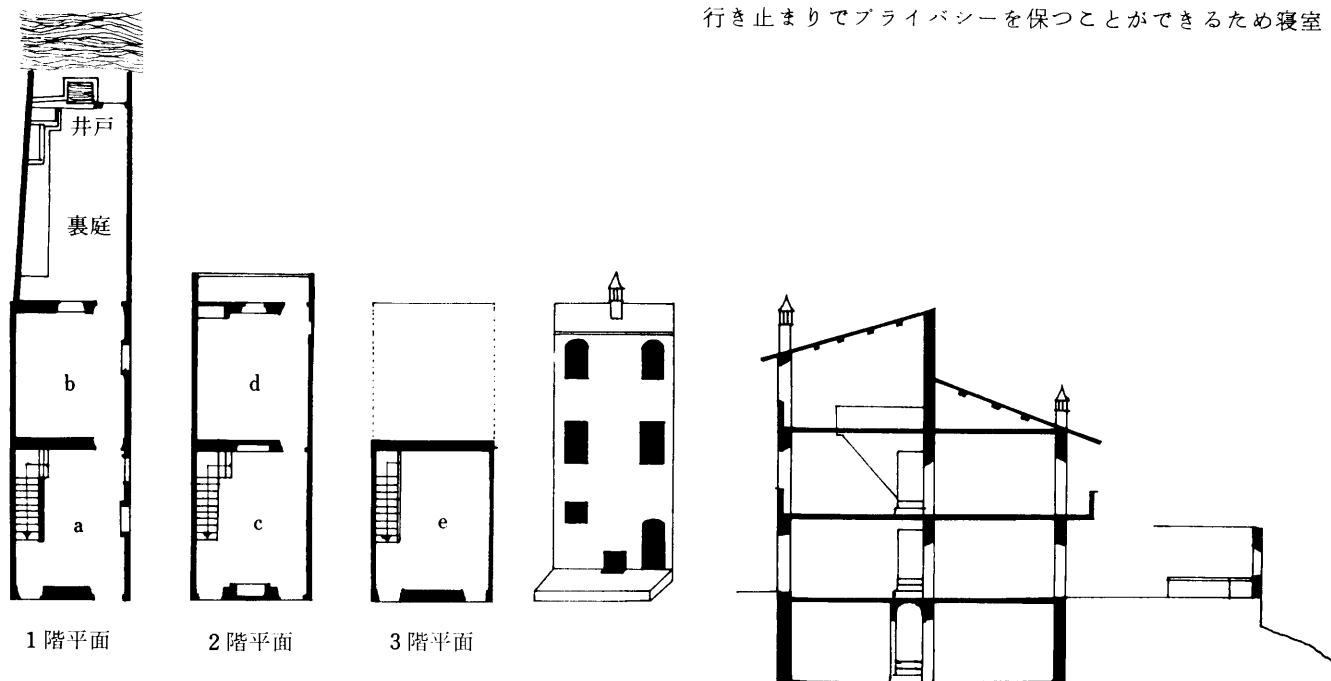
図(4), Dの住宅は上下にチェルラが重なるだけでなく、裏庭側にもうひとつのチェルラが連なっているので2チェルラの住宅と呼び、A, B, Cの1チェルラの住宅と区別しよう。そうすると、少なくとも2チェルラの住宅は1チェルラの住宅よりも平面的に倍の面積を有し、空間単位あるいは室数は一挙に増加している。住宅の発展過程からも1チェルラは中世的な要素を残し、2チェルラはルネッサンス以後の形成となる。

チェルラの単位は前面道路に対してほぼ一定の開口を

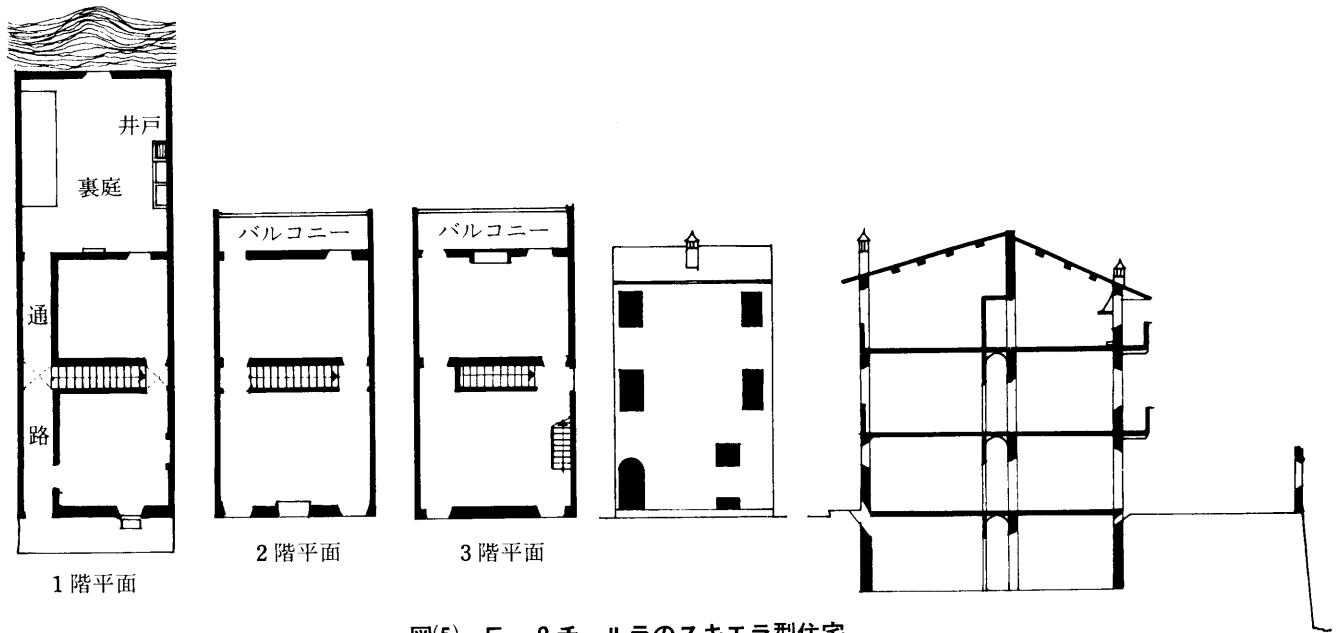
もっていて、形態的な継承はディメンションを含んでいる。たとえば、住宅Bでは約20パルミの基本寸法となり、住宅Aのようにチェルラの片側に通路、階段がある場合、この基本寸法プラス約10パルミで約30パルミの間口となる。ただし、パルミはローマ地方の単位寸法で、22.34cmであるから、チェルラの間には約4m50cmから6m70cmの間となる。

2チェルラの住宅にとって裏庭の機能は1チェルラの場合よりも重要性が増す。1チェルラの裏庭は、もし井戸が道路側にある場合、付属する必然性がない。それに比べ、2チェルラの住宅においては、Dの例からも明らかとなり、b, dの室は裏庭から採光を得る必要がある。従って、裏庭の機能は井戸を中心とした家事作業と採光の二重の用途をあわせもち、その付属は必要条件となる。この裏庭の問題は、住宅が基本的に水と光を必要とすることを意味し、都市的状況のなかでスキエラ型住宅が得た一つの解決であった。

2チェルラの住宅の部屋の構成は1チェルラの場合の様に1室あるいは2室の単純なものではなく、多室住宅として「住む」ための機能が部屋ごとに分化している。その部屋がどのような用途をもち得るかは室の結合の関係によって決まる。その結合関係を示すものに住宅の入口から部屋にたどり着くまでのアプローチの動線がある。たとえば、図(4), Dの住宅では、a, b, cは動線が通過し、d, eは行き止まりとなる。これに加えて部屋の位置関係から、aは前面道路と直接連結し、エントランスホール的な用途をもつ、bは裏庭に接し、水関係の作業場と厨房が中心となる。2階のcはdと上階のeへ行くための動線の要となり居間的な用途、dとeは動線が行き止まりでプライバシーを保つことができるため寝室



図(4), D 2 チェルラのスキエラ型住宅



図(5), E 2チェルラのスキエラ型住宅

となる。このように、スキエラ型住宅の構成は外部の都市的な組織と内部の空間単位の組織はしっかりと結び合っているのである。

ここでは2チェルラの2家族住宅(5), Eを観察してみよう。Dの住宅との違いは1階平面に前面道路から裏庭に抜ける通路があることで、そこに上階への段階が取りついている。また、1チェルラの2家族住宅(1), Aと比較すると、Aでは道路から直接1, 2階の住宅へアプローチするため立面の入口も別々となっている。Eでは入口が一ヶ所となり1階の住宅は通路から入り、上階の住宅もその通路からアプローチする。しかも裏庭の井戸も共有であるため、この通路全体は共同のスペースとなっている。この新しいエレメントは住宅が1家族専用であったものが、都市化の進行とともに多家族化し、その住宅内部に新しい社会的関係が誕生した結果に他ならない。この専用住宅から共同住宅に移行する傾向は次の新しい住宅類型、リネア型の住宅を生む要因となる。

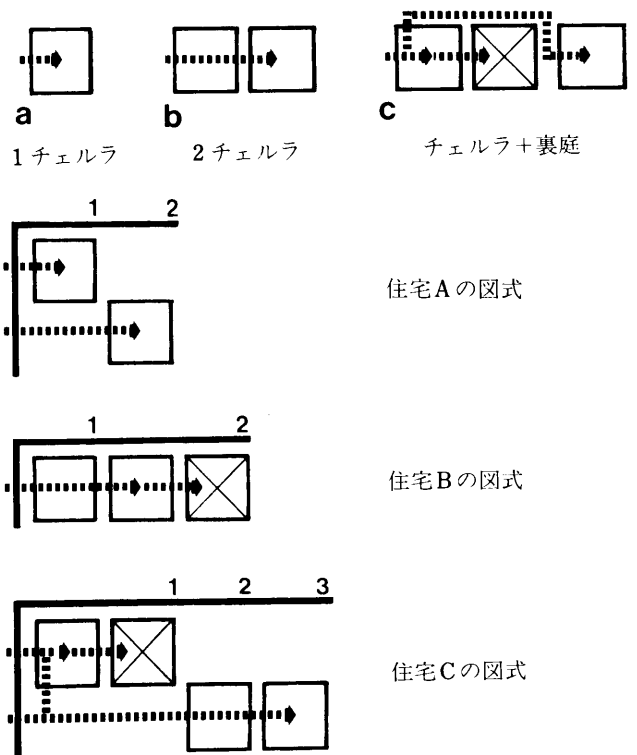
以上、2チェルラのスキエラ型住宅の特徴は、単に1チェルラの住宅に比べ、スペースが量的に増加しただけではなく、住宅の構成と裏庭の重要性、室の機能分化、共同のスペースなど多くの点で都市の住宅としての利点を獲得しているといえる。中世的な1チェルラから2チェルラへの展開は社会経済的な発展とともに、中世からルネッサンスにかけて都市の組織構成に大きな変化をもたらし、それと同時に都市と一体となっている住宅の成長というかたちであられる。

4. スキエラ型住宅の分類

これまで説明してきたスキエラ型住宅の空間構成を図

式化することができれば、住宅の骨組みである内部の組織を明確に把握することができるであろう。そうすれば、スキエラ型住宅の典型的な例だけでなく、数多くの変種すなわち、特定の条件によって変形した住宅も例外なく分類することができる。

まず、基本となる1チェルラのスキエラ型住宅を例にすると、住宅組織を構成する空間単位とその特性を図示する必要がある。図(6)にみるとおり、アプローチの動線



図(6) 住宅組織の図式化

を破線、住宅の入口から室に到る方向を矢印とし、スキエラ型住宅の場合、空間単位と部屋は一致するのでそれを矩形として表現すれば、1室住宅はaとして表現できる。bでは2室の場合で、前の部屋は動線が通過し、後ろの部屋は行き止まりとなる。cは裏庭を所有し、2階建の2室住宅の場合で、動線は裏庭へ行く方向と、階段によって2階の室に向うものに分岐する。

図1、Aの住宅を図式化するためには二つの規則を決めておく必要がある。この住宅は前面道路に二つの入口をもっていて、2家族の住宅にそれぞれ到達するから、二つのアプローチの系統、あるいはシリーズがある。そして、図式において、シリーズは常に左側から右側に順次並ぶものとすれば、現実の住宅においては、1階から2、3階へ、前面道路側の室から次の室へと進むことになる。この順序をオーダーと呼ぶ。この二つの規則、シリーズとオーダーを縦、横の座標に表現すれば、図(1)、Aの住宅は図(6)に示すように図式化できる。横方向、上部の数字は階を示している。図(2)、Bの住宅はシリーズ1で、2階に裏庭がある。図(3)のCは商店と住宅のシリーズがあり、しかも相互に連絡をもっている。このように、スキエラ型住宅を図式化すれば、一見してその住宅がもっている組織構造が明確となり、分類の手がかりを得たことになる。

1チェルラ、2チェルラのスキエラ型住宅をその組織構造の特徴に従って比較分類し、ひとつの表にまとめてみよう。

まず、これまでの分析から得た結果をもとに分類基準を作製する必要がある。分類にとって重要なポイントは、分類の対象となるものを区分する特徴を抽出すること。それと同時に、その特徴が対象の構成を決定している(標識となる)ことである。たとえば、住宅を分類対象としたとき、窓の形、屋根の形などは、住宅組織の観点からは住宅の構成を決定する標識とはならず、二次的な分類基準となる。

従って、スキエラ型住宅の分類基準を整理してみる。形態的特徴から

- A. 1チェルラか2チェルラか。
- B. 1室住宅か多室住宅か。
- C. 裏庭、通路をもっているか。

機能的特徴から

- D. 1家族住宅か2家族住宅か。
- E. 「住む」こと以外の用途が付属するか。

一覧表は分類の目的に従って作製されなければならない。その目的によって、分類基準の重要性の順位を決める必要がある。われわれの場合、次章の「スキエラ型住宅の形成過程」を理解できる表を目的とする。そうすると、Aは基本的な基準となり、歴史的な発展過程からも、1チェルラから2チェルラのスキエラ型住宅へ移行した

ことは明らかである。よって、表は全体に二つに分かれる。

つぎに問題となるのは、BとDの基準である。Dの単一家族か2家族住宅かは、スキエラ型住宅が専用住宅から共同住宅へ移行の過程を示す。しかし、共同住宅といっても、スキエラ型ではアプローチのシステムの限界により、一般的に2家族住宅にとどまる。また、住宅は全体として一つの組織体を構成するとき、2家族住宅であれば二つの下位の組織を含む。家族数と組織の数とは対応するからDの基準は、住宅が組織をいくつ所有するか、複数であれば組織相互の関係はどのようなものか。第二に、その下位の組織の構成はいかなるものか、である。これらの分類基準を住宅の図式にあてはめると、シリーズの数とシリーズ相互の関係に相当する。

Bの基準は住宅のなかの住宅が所有する室数を問題とする。すなわち、Dの下位の組織の構成と関連する。スキエラ型住宅では、組織の構成単位あるいは空間単位と部屋は一致するから、組織がいくつの空間単位によって構成されているかが分類基準となる。

Cの基準は、Dの基準に含まれ、それらのエレメントの有無によってより細かく分類される。Eの基準については住宅の組織プラス他の組織となりDの基準と同様に考えることができ、作製した表では省略されている。

結局、Aの基準のつぎに重要な基準は、BとDで、横方向をD、縦方向をBの座標とすれば、図(7)の表ができあがる。ただし、この表で表現した住宅の平面、立面は現実のおおくの住宅から抽出された模式図的なものである。現実の住宅はさまざまなヴァリエーションが存在し、二つの項に該当する中間的な形態もありうる。

5. スキエラ型住宅の形成過程

作製した分類表、図(7)からスキエラ型住宅が形成される過程を読みとってみよう。

この表では、1チェルラから2チェルラへの移行は自明のものとしてあつかい、大きく二つの表に分離したのであるが、この移行の過程をより具体的な住宅の例から考察してみる。

図(8)の住宅は、1チェルラから2チェルラへ移行する過渡的な状態をよくあらわしている。断面を観察すると、前面道路に面する主棟とのちに増築されたと推測される付属屋が明確に区別できる。増築後の平面構成は、1、2階は2チェルラとなり、裏庭を所有している。各室の用途機能は、1階道路側の部屋(a)が立面開口部から判断すると商店、裏庭側の増築された部屋が水の関係から厨房、2階裏庭側の部屋(d)がアプローチの動線が通過することから居間、道路側の部屋(c)と3階(e)は寝室となる。

この住宅が1チェルラの増築される前の状態を推測し

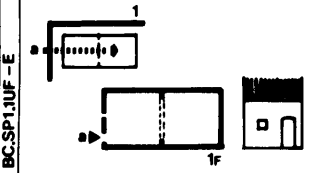
1	MC	1 チェアラのスキエラ型住宅：分類の基準は住宅の内部組織から、住宅の室単位数（MS，SP1）と家族単位数（1UF，2UF）を縦横の座標に設定した。	
	MS	1UF 1家族住宅	2UF 2家族住宅
1 1室住宅	MC,MS,1UF-E	<p>スキエラ型住宅の最もプリミティブな形態で、基本類型(Tipoelementare)と呼ぶ。1室，1階だけの住宅で三方は隣地に接し，一面だけ前面道路に開口をもつ。この住宅は「住む」ためのすべての機能を1室に含む。次の段階では機能，空間の分化によって多室住宅へと発展する。チェアラの間口は約20バルマ（4.5m）。</p>	<p>2家族の住宅はそれぞれ独立分離し，道路から直接アプローチする。</p>
	-AP	<p>井戸のある裏庭（A P）を所有する。</p>	
	-AP,ap	<p>2家族とも裏庭と連絡をもつ。通路(ap)は2階の専用アプローチに使用される。階段は屋内と屋外(se)がある。</p>	
	-AP,ac	<p>2家族とも通路によってアプローチする。共同の通路（ac）入口をもつ。</p>	
2 2室住宅	MC,SP1,1UF-E		<p>1室住宅の項に比べ，2階から3階建に増築されているが，1階の住宅は1室住宅のまま，上階の住宅に吸収されるか，あるいは商店，仕事場となる傾向がある。</p>
	-AP		
	-AP,ap		
	-AP,ac	<p>1室住宅（MS）が2室（SP1）に分化している。室の用途はアプローチの動線が通過するか，行きどまりになるかによって決まる。前者は1階，厨房，居間，後者は2階で寝室となる。裏庭（AP）は採光を得るのが目的ではなく井戸を所有するためである。</p>	

2

BC 2チェルラのスキエラ型住宅：表1の各項は表2と対応している。2チェルラの住宅は1チェルラの1室を2室に置き換えたもので、住宅組織は1チェルラの住宅と相似である。

SP1
2室住宅

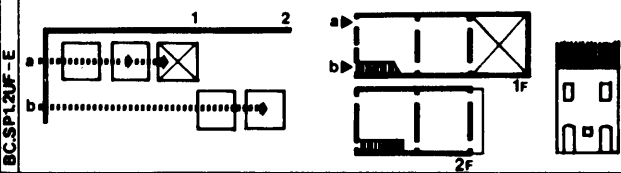
1UF 1家族住宅



1家族1室住宅と同じ組織をもっているが、室は2室分の広さになっている。
裏庭を所有していないため採光を得ることができず、間仕切壁はなく、大梁を受けるためのアーチがある。

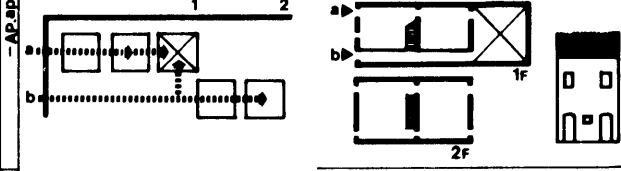
BC.SP1.1UF-E

2UF 2家族住宅



2階の住宅は裏庭側の室が厨房となり、バルコニをもつ場合がおおい。

BC.SP1.2UF-E



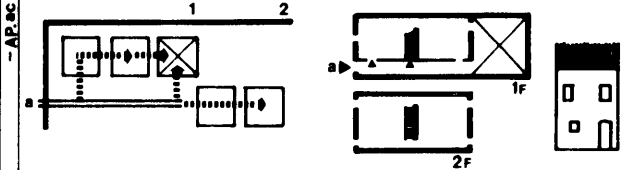
2階の住宅専用の通路 (ap) をもつ。階段の位置は中央にある場合と、裏庭にある場合とがある。

-AP.sp



裏庭側立面

-AP.sp



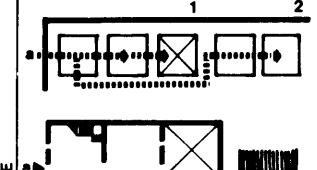
2家族共同の入口通路 (ac) をもつ。

-AP.ac



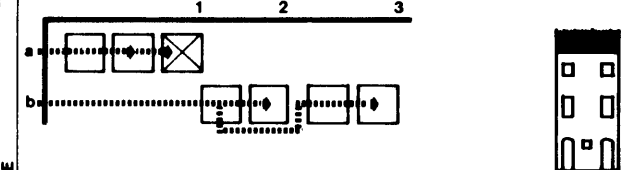
裏庭側立面

SP2
4室住宅



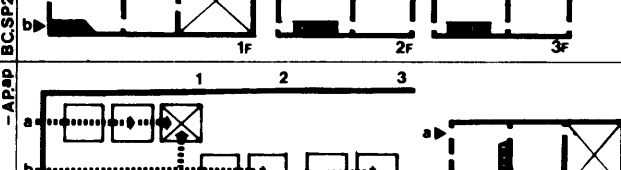
2チェルラ4室の住宅。用途は1階道路側の室はエントランスホール、裏庭側は厨房、2階前面は居間、裏側は寝室となる。裏庭は井戸のある作業場と採光を兼ね、2チェルラの住宅にとって裏庭の所有は必要条件となる。

BC.SP2.1UF-E

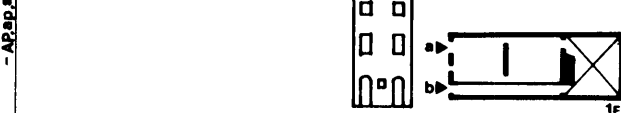


2家族4室住宅 (SP2, 2UF) は上の項 (SP1, 2UF) の住宅に3階が増築されたもの。また、表1の右下の項 (MC, SP1, 2UF) の1室を2室に置き換えたものと同じで相互は相似の関係にある。

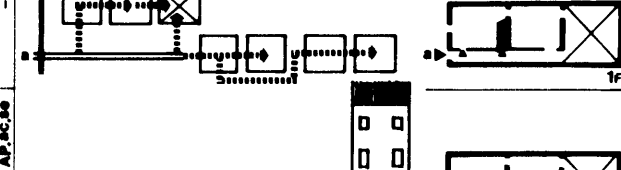
BC.SP2.2UF-E



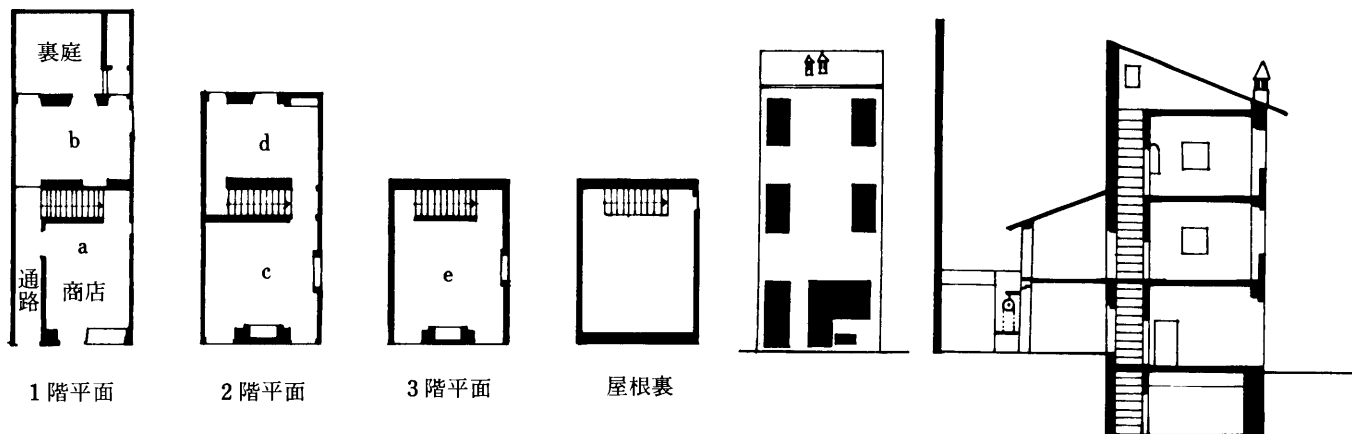
-AP.sp



-AP.sp



-AP.ac



図(8) 2チェルラのスキエラ型住宅(商店付)

てみる。一般に、スキエラ型住宅で1階平面に裏庭への通路をもつ場合、住宅の間口は30パルマ(約6m70cm)をとるのが普通であるのに、この住宅は通路を所有するにもかかわらず23パルマ(約5m)しかない。この理由は、増築前では、2、3階の住宅部分と商店とは分離せず、1階には厨房もあり、道路からの出入口も商店と兼用されていたにちがいない。したがって、図(3)、Cの住宅の構成と類似していた。それが住宅部分と商店とを分離する必要から、前面道路に新しい入口、裏庭と階段へアプローチする通路、商店と分離した厨房などが増築されたと考えられる。

一般に、1チェルラから2チェルラの住宅に発展する主要な理由は二つある。

一つは、住宅の内部の組織が発展するもので、1室住宅から多室住宅へ変化する過程としてあらわれる。その主な原因は、すべての「住む」ための用途機能が1室でまかなわれていたものが、社会経済的な発展にもなると、用途機能の分化が生じ、用途ごとの専用空間が誕生するためである。

他の理由は、家族成員の社会的、経済、生産的活動が住宅に反映したために生じるもので、住宅の特殊化と呼び、「住む」ための用途機能以外のものが住宅に付属する。たとえば、図(8)の住宅のように、1階に商店が付属し、初期の段階では住宅と融合していたものが、商業活動が盛になるにつれて住宅の組織から独立したものになる。その結果、住宅部分のスペースが減少し、その減少したスペースを補うため増築がなされる。これはあたかも、住宅以外の要素が住宅のなかで増殖し、住宅組織に圧力が加わり、つぎの段階へ移行するかのようである。

これらの要因により、住宅が膨張する方向は二つの可能性がある。上階へ積み重なる方向と裏庭側へ増築される方向である。建築技術的に増すことの限界が平面的な増築へ導く。つまり、1チェルラから2チェルラの住宅へと発展するのである。

分類表を読みこむことによって、スキエラ型住宅の形成過程を検討してみよう。

表の構成は、縦軸に空間単位を横軸に家族単位を座標として設定した。そこで、この表のなかにどのような発展の規則性があるかを観察してみる。左から右方向では、1家族から2家族に、それと同時に階数が増す。表の上から下の方向では、1室(2室)から2室(4室)となり、同様に階数が増えている。だから、建築技術と住宅の発展、成長が一致すると仮定するならば、この表のなかでの時間の流れは、1、2チェルラそれぞれの表(表1、表2とする)において、時間の流れは左上から右下の方向に進行する。

また、表1、表2それぞれについて、おおきく上の項と下の項に分割し、住宅の図式を比較すれば、上下の項は対応関係をもっている。上下の項の図式は、ほぼ同じ構成をとり、シリーズ、アプローチのシステムは変化せず、ただ下の項はオーダーが増し、アプローチの動線の通過する室が加わっている。つぎに、表1と表2はどのような関係をもっているだろうか。最も単純な表1の1室1家族住宅(MC, MS, 1UF)と表2の2室1家族住宅(BC, SP1, 1UF)を比較してみると、シリーズ、オーダーの構成は同じであるが、空間単位は倍に増加している。表1、2の対応する項についても同様の関係が生じている。従って、表1の住宅の空間単位である1室を2室に置換してみると、表2の2チェルラの住宅ができあがる。ただ、表1では裏庭をもつものともたないものがあるのに比べ、表2では裏庭の所有が必要条件となる。このように、表1と表2、すなわち1チェルラと2チェルラの住宅は相似の関係である。

この形成のメカニズムをひとつの概念で表現すれば、アナロジー的(あるいは類推的)発展と呼ぶことができる。それは、1チェルラの時代にすでに2家族2室住宅の組織構成を獲得し、建設技術的な限界である3階建に行きついたときに、新しい2チェルラの段階に移行する。

2 チェルラの段階では、すでに1 チェルラの段階で得た構成に、1室を2室に置き換えるだけで表2の2室から4室の住宅を得ることができる。このアナロジーの発展の形式は二段階の節となり、第一段階で準備された構成が第二段階で類推的に応用されるのである。

このように、あるひとつの段階から他の段階へ一定の形式を伴って移行することを過程と呼ぶ。過程には形成の過程と変化の過程がある。形成の過程は、初期の段階から完成された段階へと発展する過程で、組織構造的な観点からいえば、組織Aから組織A'に移行することで、AとA'は相似した関係にあり、本質的には同じ構造をもっている。そういう意味で図(7)の表はスキエラ型住宅の形成過程をあらわしている。変化の過程は、組織Aが何かの理由で組織Bに変化してしまう過程である。たとえば形態的に類似している場合でも、その組織は異質なものとなる。

過程は、建築、都市を抽象的な意味の空間の構造としてとらえたものに、時間の概念を導入することである。住宅の場合、要素、組織構成の特性によって分類されたグループを、発展の段階を示すことができる座標のなかに配列することによって、形成、変化の過程がダイナミックに把握できるのである。

6. 変化の過程、リネア型住宅の成立

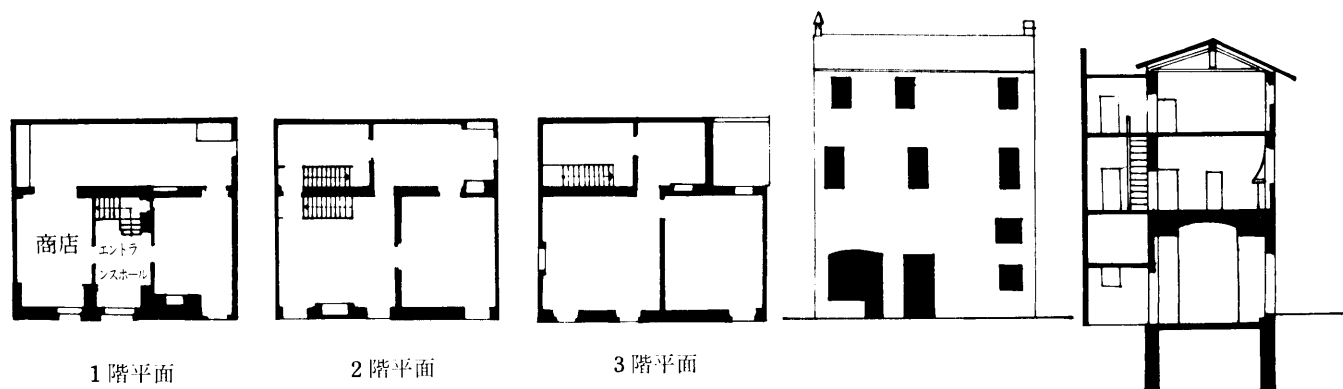
都市ローマは、ローマ帝国滅亡とともに人口は減少し、12世紀中世では3万5千人で、15世紀まで人口増加は認められない。この間にスキエラ型住宅が誕生した。その後、商工業の発達に伴って、都市復興の時期を迎え、16世紀初期では4万人、17世紀はじめには11万人と、急激な都市人口の増加が認められる。この16世紀の社会、経済的発展を伴う都市膨張は、都市の細胞である住宅にもおおきな変化をもたらすことになる。

その当時の住宅、図(9)に注目してみると、いままで論じてきたスキエラ型住宅の概念はあてはならない。この

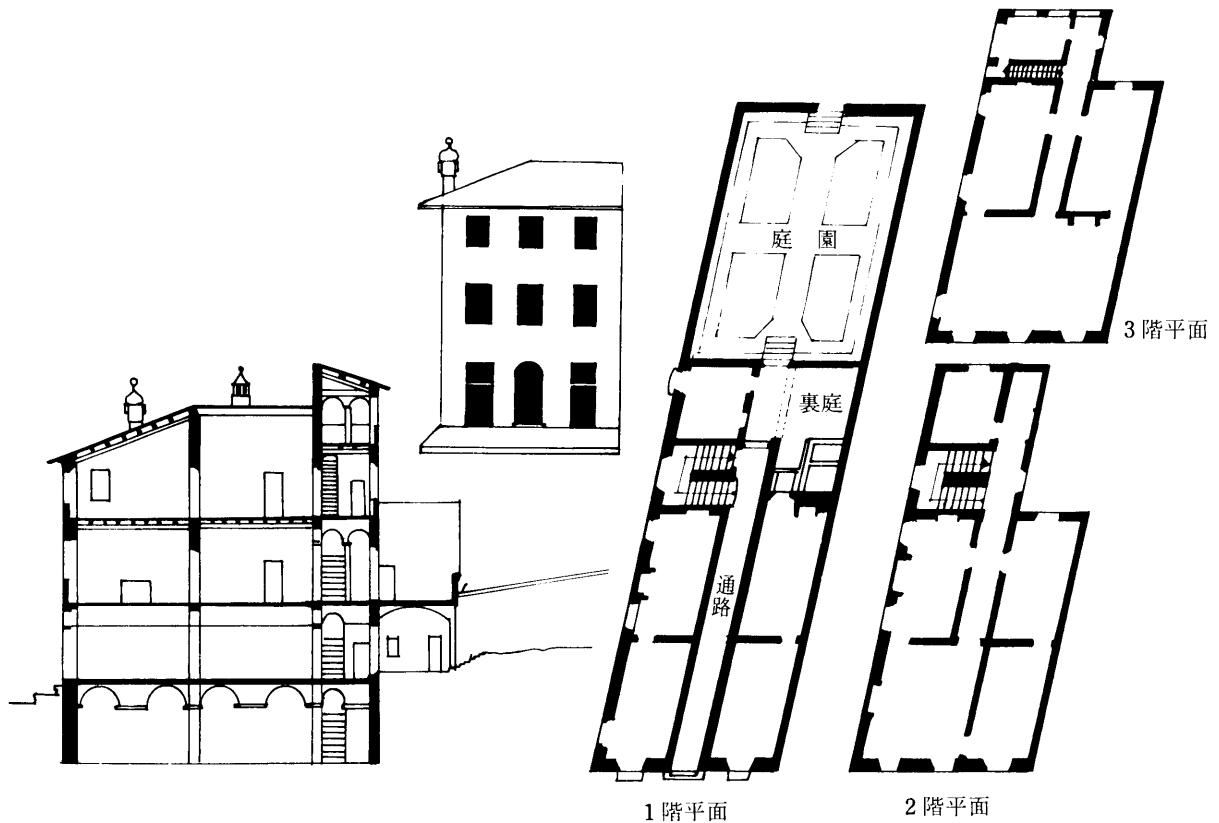
住宅は、間口が48パルマ(約10 m 60 cm)とスキエラ型住宅の2倍の間口をもっている。この意味は、かつて二軒の隣接した1チェルラのスキエラ型住宅がひとつに融合して、新しい型の住宅が成立しているのである。また、断面に注目すると、かつて裏店であった部分が屋内となっているが1チェルラのときの構造壁がそのまま残っているのがわかる。平面からは、1階が商店とそれに付属する室、エントランスホールなど、2、3階はそれぞれ1家族ずつの2家族住宅である。スキエラ型住宅の原則は、チェルラの空間単位が上階に積み重なり、1家族が2階あるいは3階分を所有する縦わりの住宅構成であるのに、この住宅は前面道路に対しチェルラが並列し、しかも各階ごとに分割された横わりの構成をとっている。また、住宅組織の観点からは、エントランスホール、階段が巧みに独立し、アプローチの動線がスキエラ型住宅のように室を通過することなく3階まで到達している。住宅内部には二つの組織があり、その組織を結ぶ共有の空間が生まれている。これらいくつかの特徴によって、この住宅はスキエラ型とは区別され、リネア型と呼ばれる共同住宅である。

なぜこのように、スキエラ型住宅に改造が加えられたのかを考察してみよう。図(7)の表には2家族以上の共同住宅は存在しない。最大に発達した4室2家族住宅(B C, S P 2, 2 U F)の項をみてもわかるとおり、直行型階段のアプローチシステムの限界のために、構成は2家族にとどまっている。都市ローマの16世紀は都市への人口の集中を招いた結果、社会的要求としてスキエラ型住宅の限界を打ち破り、人口過密に答えた新しい共同住宅の概念を誕生させるのである。

図(10)の住宅は、スキエラ型の変形によってではなく、新しい計画概念によって建設されたリネア型住宅である。この住宅の特徴型階段にかわる折り返し階段のシステムである。この階段は独立した各階の住宅にアプローチする共同の分配空間(個の空間に対比させて)となっている。また、各階の住宅廊下が出現している。ス



図(9) リネア型住宅 (スキエラの変形)



図(10) リネオ型住宅

スキエラ型住宅では、アプローチの動線が住宅内の室を通過し、室の独立性を欠いていたのを、動線が通するのを居間、行き止まりを寝室としてうまく解決されてきた。リネオ型住宅では、通路専用の空間（分配空間）の出現によって、住宅全体においては各戸が、一戸の内部においては個室（個空間）が独立性を保っている。その結果、各室は自由に用途を選択することができ、家族形態に適合した住み方がある程度可能となった。ただ、図(10)の住宅は、まだスキエラ型のなごりとして、それぞれの室は廊下に独自の出入口を所有しているにもかかわらず、他の室と直接連絡されている。

このように、リネオ型住宅が獲得した計画概念をひろいあげてみる。

1. 問口はチェルラの単位に限定されない。
2. 2家族以上、多家族の共同住宅が可能となる。
3. 入口、通路、折り返し階段など共同の分配空間を所有する。
4. 住戸内部に廊下をもち、室は独立性を保つ。

これらは、住宅が社会の要求を敏感に反映し、全体としては共同住宅、内部では個人がプライバシーを保つことができる個室の概念が確立し、まさに近代社会にふさわしい住宅へ一歩近づいたといえよう。

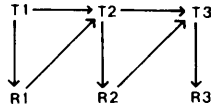
これまでみてきたように、16世紀の都市的發展は住宅の変化におおきく作用しているが、都市のそれまであ

った中心部と新しく拡大膨張した部分では違った現象としてあらわれた。16世紀以前に、すでにスキエラ型住宅で埋めつくられた都市中心部では、図(9)の住宅のように、既存の住宅を増改築することによってスキエラ型に変形した。拡大した都市周辺部では新しい計画概念によってリネオ型住宅が建設される。この事実から、われわれが学びうる都市發展のメカニズムは、既存の歴史的地域は新しい時代の要求に応じて新しい住宅類型を生みだす準備がなされ、ゆるやかに変形の過程をたどる。新しい地域では、古い住宅類型を継承しながらも、新しく獲得した概念を計画的に実現する。このように、都市はいつまでも建設された当初の状態を保ちつづけるのではなく、継承されたものと、新しいものとのダイナミックな相互作用によって発展していくのである。

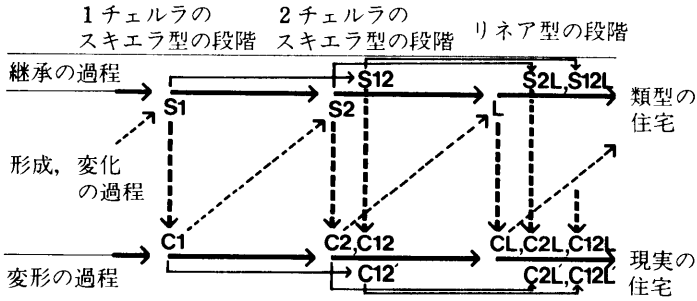
7. 住宅類型と現実の住宅

住宅類型が成立し、發展する過程をどのようにたどるか、現実の住宅、都市とのかかわりからひとつの仮説をたててみよう。

これまで説明してきたスキエラ型、リネオ型などの住宅類型は現実の住宅と区別される。類型分析の手順からは、現実の住宅をグループに分類し、そのグループの所有する特徴がひとつの類型に対応する。グループの成員



図(11) 類型の住宅(T)と現実の住宅(R)との関係



図(12) 住宅類型の発展過程

である現実の個々の住宅は、都市の立地条件、住み手、建設者の個人的な要求を反映し、おおくのヴァリエーションが存在するものである。住宅類型は抽象的な住宅の概念であり、人々によって保持され、継承される社会的、文化的な共有物である。したがって、現実の住宅は個人に属し、類型は社会に属している。

類型と現実との関係は、たがいに他を予想し、一方がなければ他は存在しえない。類型は人々の介入によって成立するひとつのアイデアである。また、人々によって保持される類型は現実の住宅をつくりだし、その住宅組織のモデルとしての役目をはたす。そして、類型はみずからがつくりだした住宅、都市の現実から作用を受け、古い類型をなんらかのかたちで継承しながら新しい類型を生み出す。これらの関係を図式すれば図(11)となる。類型T1と現実R1は対応関係が成立し、次の段階では、前の段階のT1とR1から新しい類型T2が生まれる。類型の基本的な発展の過程は、この三角関係の繰り返えしとなる。

こんどは、この図式を実際に則して考え、スキエラ型住宅の形成、変化の過程とリニア型住宅の形成の過程に適用してみる。図(12)

都市ローマでは、中世半頃から後半にかけてスキエラ型住宅が完成する。最初は、1チェルラのスキエラ型S1からはじまる。このS1の形成には、古代ローマ時代のドモス住宅、インストラ住宅、地域的な農村住宅などの影響があったにちがいない。この1チェルラのスキエラ型は非計画的であるという意味で、形態的に自然発生的な都市の現実をつくりだした。

時代が中世後半からルネッサンス初期に移るにつれて、2チェルラのスキエラ型S2が形成される。このS2はS1のアナロジーの発展と現実の住宅C1から形成される。C1-S2の関係は、S1がつくりだす住宅と都市

の状況から説明される。1チェルラのスキエラ型住宅は、初期の裏庭を所有しない場合、建物と敷地の境界は一致し、敷地計画の概念はない、しかも中世都市では道路も計画的ではなく不規則な形態をとっている。この都市の無計画性の反省から、2チェルラS2の時代では敷地計画技術を獲得することによって、合理的な土地利用、道路計画が可能となり、裏庭をもつ2チェルラのスキエラ型住宅が必要とする短冊型の敷地が計画されるのである。また、2チェルラS2の時代には、1チェルラの類型がなくなってしまうわけではない。この引き継いだ1チェルラの類型S12は、その時代の住宅の主流になることはできないが、都市的コンテキストの違いや、社会階層の分化にもなると、ある階層の住宅類型となる。そして、現実の側では、S2、S12によって新しく建設されるものに加えて、既存の住宅C1が2チェルラの影響を受け、変形した住宅C12'となる。

リニア型の類型Lの形成も全く同じ過程をたどる。段階を経るほど複雑な継承と変形の関係が生ずるがその過程のメカニズムは同じ原理に支配されている。図式からは、新しく生れたりリニア型の類型L、継承された類型S2L、S12L、類型によって新しく建設された住宅CL、C2L、C12L、新しいリニア型の影響を受けて変形した既存の住宅C2L'、C12L'となる。

結論として、われわれはこの理論を住宅、都市の歴史的現実の分析に応用することができる。現実の住宅、都市は複雑な過程を類型という概念によって解きほぐし、現実の住宅、都市を成立させている構造を把握することができる。われわれが受け継いできた都市の歴史的現実を都市をかたちづくる土台であった。その土台は、現代の側から、すでに価値が認められない対象となり、経済性という理由によって、破壊されつつある。この土台の喪失は、土地、建物投機によって膨張するメカニズムをつくりあげ、現在、われわれが手にしている近代都市の終着点へと導くのである。

参考文献

R. Biasutti, Per lo studio dell'abitazione in Italia, 1926, Rivista Geografica italiana.

S. Muratori, Studi per una operante storia urbana di Roma, Roma 1963

P. Maretto, Nell'architettura, Firenze 1973

G. Caniggia, G.L. Maffei, Composizione architettonica etipologia edilizia, Venezia 1979

図(1, 2, 3, 4, 5, 8, 9, 10)の住宅図面は、Archivio di Stato di Romaに保存されているArchiospedale di Santo SpiritoのLibro delle piante (I.V.N. - B. 1458)からコピーした。